

労働 経済 旬報

1996年
4月下旬号
No. 1558

RODO KEIZAI JUNPO

シンポジウム 社会変革のロマンと可能性

—清水慎三著『戦後革新の半日陰』をめぐって

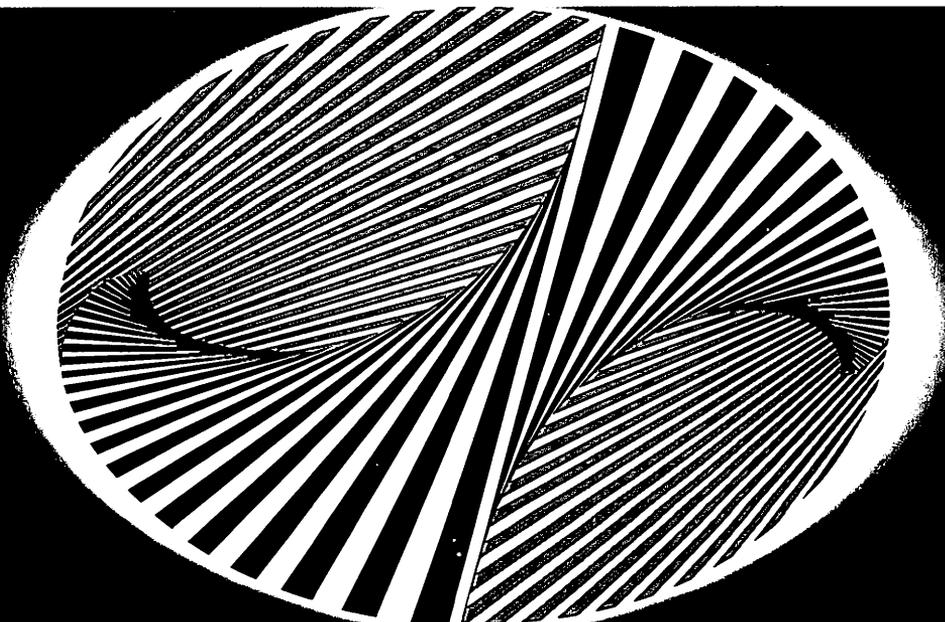
田口富久治 住沢博紀 加藤哲郎 平井陽一 小畑精武 五辻 浩
兵藤 釧 熊沢 誠 猪瀬直樹 高橋彦博 三宅明正 鷲尾悦也
三階泰子 中島正道 高木郁朗 清水慎三

とりこになる本① 世界は夢、夢こそ生(真木悠介『旅のノートから』〈三宅喜代子〉)

連合がめざす社会と当面の基本政策

労働省 1995年産業労働事情調査結果(速報)

労働経済指標



シンポジウム 社会変革のロマンと可能性 (4)

清水慎三著『戦後革新の半日陰』をめぐって

問題提起

- ①日本リベラルへの提言
- ②社会主義再生の可能性
- ③新しい社会運動の萌芽

住沢博紀 加藤哲郎 平井陽一 小畑精武 五辻 浩

対話者から

新しい社会運動の担い手の形成

会場から 質問と意見交流

田口富久治 兵藤 剣 熊沢 誠
猪瀬直樹 高橋彦博 三宅明正 鷲尾悦也 三階泰子

総括コメント 清水慎三

とりこになる本①

世界は夢、夢こそ生——へ三宅喜代子

——真木悠介『旅のノートから』岩波書店 定価二四〇〇円

連合がめざす社会と当面の基本政策

労働省 製造業における国際化と労働面への影響に関する調査

——一九九五年産業労働事情調査結果速報

労働経済指標

賃金が抑えられる基幹的労働者

業種別生産指数と在庫指数……(4) 消費者物価指数(全国96年1月、東京96年2月)……(5)

主要都市別消費者物価指数(96年1月)……(6) 産業別賃金・労働時間・労働日数(毎月勤労統計)……(8)

名目賃金指数・労働生産性指数・労働異動・

雇用保険・倒産・百貨店販売高・労働力状態・失業・労働市場・家計収支・

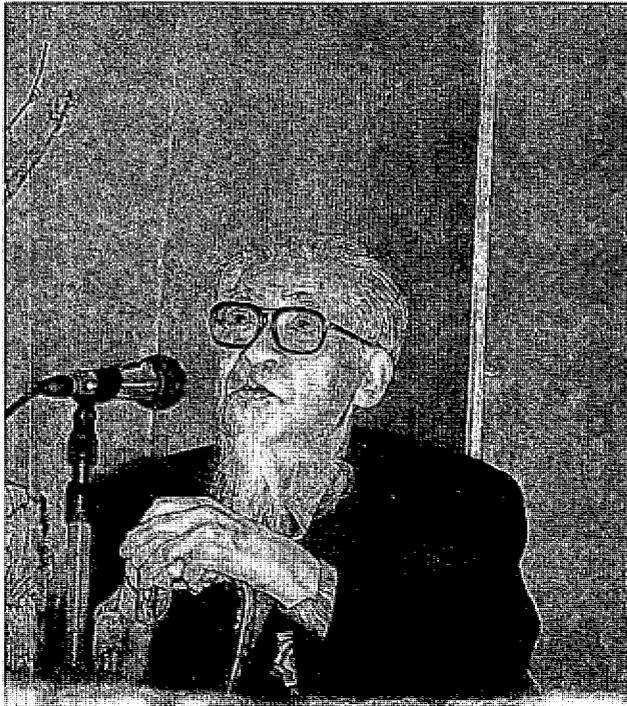
消費者物価特殊分類・卸売物価指数・輸出入・国際収支・日銀券発行高……(12)

都市別家計調査(勤労者世帯・96年1月)……(14)

今回は、「連合の組織拡大方針」についての議論を掲載する予定でしたが、都合により「シンポジウム・社会変革のロマンと可能性——清水慎三著『戦後革新の半日陰』をめぐって」に変更しました。戦後日本の社会運動や労働運動の中心的理論家として活躍された清水慎三先生の新しい著書で展開された問題点について、さまざまな立場から議論されており、労働運動や市民運動に携わっている方々には、大いに参考になると思います。

「連合の組織拡大方針」につきましては、次号で特集する予定です。

(編集部)



シンポジウム
社会変革のロマンと可能性

■清水慎三著『戦後革新の半日陰』をめぐって

戦後革新勢力のブレイン的存在であった清水慎三氏を囲む討論が、『戦後革新の半日陰』（日本経済評論社刊）として昨年の秋に出版され、今年の三月二日、この書物の刊行を受けた形で、シンポジウムが開催された（東京・神楽坂、出版クラブ）。清水氏本人と対話者はもちろん、現役・OBを問わず幅広いセクターから約七〇人が参加し、密度の濃い討論が繰り広げられた。本誌では、実行委員会の協力を得て、当日の討論の概要を掲載することにした。

開会にあたって

田口富久治（立命館大学）

清水先生の『戦後革新の半日陰』が生まれる経過について、若干ご紹介させていただきます。一九九二年二月に名古屋の中京大学でグラムシについてのミニシンポジウムが開催され、清水先生も東京からお出でくださいました。シンポジウムのあとに若い同僚と二人で近くの蟹料理屋で懇談させていただきました。ですが、私の方から先生にこれまでのお仕事をお話を回顧録風におまとめいただくのはいかがであらうかと切り出させていただきました。

前年の暮れには、ソ連邦が解体するという意味では二〇世紀を画する世界的な出来事があり、戦後の日本の歴史においてもひとつの時代が立ち去るといふような時期でしたが、そのときに、先生は「よく考えてみる」



田口富久治氏

というお話でした。そのあと、私が上京した機会に日本経済評論社の栗原さんに直接お会いし、この件についてお話をいたしました。快諾を得たわけです。清水先生の快諾も得て、一九九二年の春から、清水先生のご報告と回顧をもとに何人かの人間が討論を行い、それを重ねて、本にまとめようということになったわけです。第六回の研究会が九三年四月三日で、実はここまでは比較的順調に進んでいたわけですが、そのあとの整理にかなり長い時間をとりました。清水先生もやきもきされたことと存じます。しかしともあれ、その翌年の九五年の一〇月には『戦後革新の半日陰』ができました。

出版後、この本は読書界の注目をひきました。初めは朝日新聞の山口二郎さんの書評でした。そのあと、一〇点近くの書評、本の紹介が出ております。それらは共通して、この本の出版を高く評価するという論評でした。この本の内容、評価につきましては、今日のシンポジウムの主題そのものでありますので、私としてはこれ以上立ち入ることはいたしません。今日出席の皆さまの積極的な発言と討論によって、清水先生がこの本の中で提起された諸問題、あるいは展望につきまして忌憚のないご意見、ご討論をいただき、これからの日本の革新の前途にとって、ひとつの問題提起をなすことを私どもとしては心から望んでおります。

シンポジウム

社会変革のロマンと可能性

——清水慎三著『戦後革新の

半日陰』をめぐって——

- 一、開会にあたって 田口富久治
- 二、問題提起 ①日本リベラルへの提言
②社会主義再生の可能性
③新しい社会運動の萌芽
住沢 博紀
加藤 哲郎
平井 陽一
小畑 精武
五辻 活
- 三、「対話者」から 田口富久治
兵藤 釗
熊沢 誠
猪瀬 直樹
高橋 彦博
三宅 明正
鷲尾 悦也
三階 泰子
- 四、会場から 清水 慎三
高木 郁朗
中島 正道
- 五、総括コメント
- 六、閉会にあたって——コーディネーター

問題提起 日本リベラルへの提言と 新しい社会運動の萌芽

司会（中島正道） それでは研究者ならびに社会運動の現場で新しい社会運動をつくっておられる方々に問題提起をしていただきたいと思います。問題提起としては、三つのことを自由話していただければと思います。第一点は「日本リベラルへの提言」、第二点は「社会主義再生の可能性」、第三点としては「新しい社会運動の萌芽」。どの角度からでもどのようにでもご存分に問題提起をお願いいたします。



中島正道氏

政策転換は 政権交代によって

住沢博紀（日本女子大学）

私は、一九六八年に京都大学に入学し、全共闘の運動を経て、そのあとドイツに一五年おりました。一九七〇年代の末でしたから、福祉国家あるいは雇用の危機という状況でした。社会民主主義と言いますが、かつてのフランクフルト宣言での社会民主主義ではなく、危機の中の社会民主主義、新しい社会民主主義の模索ということですね。こういう中で私の研究は、赤と緑の新しい市民社会主義の追求でした。

一九八八年に私は日本に帰国しました。それから高木郁朗先生と知りあったこともありまして、総評センターの政治研究会とか、あるいは社会党の理論センター、などで社会民主主義を紹介し、総評センター刊の『市民自立への政治戦略』（山口定主査）の執筆にも加わりました。

私の立場はヨーロッパ民主主義を比較的若い世代として、いろいろと提案するなり、推進することです。しかし、日本の中ではたしてそのようなことが可能なかと考えてみますと、当時の連合の社民勢力の総結集論を考えましても限界があります。これを越えていかなないと無理なのだろうということで、本来社会民主主義を宣伝する私とその社会民主主義における限界を語らざるを得ないというのが、「市民自立への政治戦略」の結論でした。そして現在、村山社会民主党にかわった時点で、おそらく社会民主主義という言葉はこれで死んでしまつのではないかと思います。これまで社民というのには、悪いイメージだったわけですが、悪いイメージを村山社会民主党は完成させてくれました。日本では最後まで社民というのは悪いイメージのまま終えていくことになりました。

この本の中に「シリウス」の話が出てきます。「シリウス」は江田五月さんのグループですが、社民連、連合プラス民間臨調のグループで、日本の新しい政治を作っていくという流れが三年前にあったわけです。しかし衆議院選挙のあと「シリウス」は木々端微塵に消えてしまった。社会民主主義の関連でいけば、社会民主主義というよりもアメリカの民主党ではないのかという議論もありました。社会的なものとリベラルの連合という形で、私は提起していましたが、現在から見ると、竹下派小沢一郎、ある

いは橋本の自民党の二つのグループに解体される対象でしかなかったということですが。決して主体ではなかった。

清水先生の本を読んでいますと、未来にむけてどうするか等、いろんな構想はありましても、では一体だれが運動の主体なのか、主体を分析すれば、甘いことを言ってもしかたがないと、リアルに見ておられます。この数年間、いろんなグループができ、いろんな提起がありましたけれども、結果として、日本社会の中では非常に微々たるものであったわけです。

先日、山口二郎さんがNHKで戦後社会党史をやっていました。戦後の日本の運動の中で、六七年から七〇年の末までの革新自治体の時代を政権交代なき政策転換と言われています。革新自治体が出てきて、大衆社会の状況に自民党自体が転換している。最終的に革新自治体が再び自民党に奪われていくわけです。この政権交代なき政策転換ということに一番



住沢博紀氏

大きな問題が累積してきたのではないかと、私は思います。やはり政策転換は、政権交代をとらなければ行われるべきであります。権力の交代によって、多少のパワーシフトなり、配分の交代があるわけで、それがもし政権交代なき政策転換をおこなってまいりますと、ばらまき行政なり、GNPの拡張のもとでの予算配分は可能であっても、真の意味の転換はできないのであります。

それではどういふところから手をつけていったらいいのか。社会民主主義者がいて、社会民主主義の政策があるわけです。決して社会民主主義という客観的なものを議論するわけではありせん。それでは日本で社会党の人が「私たちは社会民主主義者だ」と言えるかといいますと、ほとんどいえないと思います。いまはリベラルであろうが、社会主義者であろうが、社会民主主義者であろうが、保守主義者であろうが、何を共通にできるかと問題を立てなければならぬ時期にきているのではないかと思います。その意味では、私は社会民主主義の理念・政策を追求いたしますが、社会民主主義が何かをしていくのではないんだという意味で、「東京市民21」というローカルパーティを海江田万里さんたち政治家と作りました。

この中で出された大きな問題提起は、日本リベラルへの提言とか社会主義再生の可能性とか、新しい社会運動の萌芽等々ですが、古いものをこわさなければ新しいものは生まれ

ないということです。歴史的な背景や伝統、社会党あるいは総評労働運動の遺産は、人的および組織の体系の中に残っています。現在の組織が解体されれば、人々が自由にノウハウを使って活動できる空間ができ、大きな遺産を活かして新しい運動に発展していく可能性があると思います。ローカル・パーティという日本の地域からの運動によって、これから社会民主主義者をも含めたさまざまな人々が集まって、新しい革新運動を作っていくことが大事なことはないかと思っております。

まず社会の創造を

加藤哲郎（一橋大学・政治学者）

『戦後革新の半日陰』の副題は、「日本型社会民主主義の創造をめざして」となっております。「再生をめざして」ではありません。これはなぜなのか。それが私が触発された契機です。結語の「私と社会主義」という部分があります。その副題は「第二の道を求めたロマンの旅路」となっております。第一と第二は何なのだろうかというのがもう一つの触発された契機です。

私が清水先生のもので学ばせていただいかつ自分自身の発言でもよく使ってきたものに、一九八二年に出されました『戦後労働運動史論』の中の清水先生の論文があります。その中で、清水さんは戦後に對する歴史観・



加藤哲郎氏

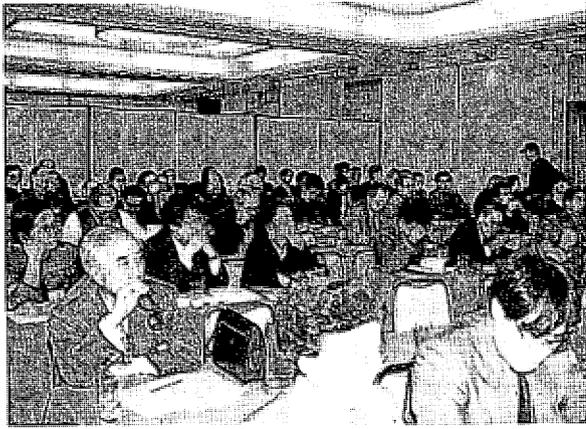
見方が二つの形で分裂してきているのではないかと言われました。戦争体験世代が戦争を贖罪しながら戦後社会を見ている史観と、戦争を知らない世代の経済成長史観というのが出てきて、それが八〇年代初頭の状況のなかで錯綜し、かつ対抗しあっているということだと思います。その中で清水さんは、一九六〇年の三井・三池と六〇年安保を戦後史の分水嶺とする問題設定をされておりました。おそらくそこにも第三の道が念頭におかれていて、単純な戦争贖罪史観でもなく、また単純な経済成長史観でもなくというのがあったと思われると思います。第一の史観、第二の史観が何で、第三が何かという問題設定をしますと、第三というのは、しばしば道をあやまることがあるのかもしれません。

しかしあえて清水先生が求めていらっしゃる第三の道というのは、何なのかということをお私なりに読みとってみました。「戦後革新の半日陰」という本の中にも、清水先生なりにいくつかの史観が出されているように思われます。たとえば岡山の六高時代のところでは、「自分は皇国史観にはとにかく反対であった。しかし唯物史観にもついていけないかった」ということで出されている。一九四五年以降になりますと、清水さんは運動の中におられるわけですが、その中で理論的思索をなされてこられました。直接には書かれてはいませんが、おそらくは講座派でも労働派でもなくという史観があったのだらうと思います。当時のいわゆる共産党や社会党の綱領論争の中で、日本帝国主義の自立か、あるいはアメリカ帝国主義の従属かという論点があったときに、清水先生の出された問題提起は、「民族解放社会主義革命」でした。つまり、民族問題を従属の問題にとり入れつつ、しかし、だから民主主義というのではなくて、社会主義をという第三の史観を提起されていたということでもあります。

さきほどの戦後型の戦争贖罪史観か、あるいは経済成長史観かという八〇年ごろの論調に対してもおそらくは清水さんは両方の論点を取り入れた史観を提起なさって、六〇年をひとつの画期として、あとの時期に対しては私生活主義の問題等々を取り入れる形で戦後労働運動史の評価をなさったのだと思います。今日の時点での問題設定においても、いわば全面的な市場経済、ないしは資本主義でもソ連型の国有化でもなく、第三セクターをという問題提起をなさっているように思えます。

しかし私の立場からすれば、いくつかの違和感もあります。たとえば、清水先生は戦争体験世代が贖罪史観で、戦争を知らない世代が経済成長史観を取っていると問題設定されていらっしゃるわけですが、私が当時見ておりましたのでは、経済成長史観を当時提起していたのは、たとえば村上泰亮さんとか、山崎正和さんとか、あるいは公文俊平さんたちのグループなどに代表されるような、清水先生よりは下かもしれないけれども、私たちがみると戦中世代ないし、戦前世代の方々であったように思います。その意味では、私たち戦争を知らない世代のところでも実はどちらの史観を選択するのか、あるいはどういうスタンスをとるのかという問題は当然かけられていたわけです。私自身は清水先生のことばを読み変えまして、占領安保史観か高度経済成長史観かという形で問題設定をして、そのどちらでもなくという形の歴史区分ないし、現代史解釈をとっておきました。

しかし、一九八九年のベルリンの壁の崩壊、東欧革命、あるいは九一年のソ連解体という状況は実はそういう短期のチームの史観とは別のもっと大きな史観の提起をしているように思われます。それについても結語のあたりで清水先生は、現在のお考えに触れられています。清水先生を代表とされる戦後革新なり、あるいは戦後民主主義というものが花を開き、ある程度定着し、ある部分はゆがめられ、そ



シンポジウム会場

していまでは大江健三郎みたいな人々によって提唱されて、ある種の反発をもよんでいる時代というものは、日本の歴史においても世界の歴史においてもきわめて特殊な例外的な時代であったという認識が必要であろうと私は思っています。人類史上、想像もつかなかった人間が殺戮された時代であった、人類が想像もできなかったほどの物が作られた時代であった、人類が想像もつかなかったほどの情報が世界を一瞬に受けまわることになった時代であった、そういう問題設定にどのような形で第三の史観が提起できるのかということ。その意味では、贖罪史観か経

済成長史観かということでは、私は批判的高度成長史観に立ちたいと思っています。しかし、その中で、では批判的な史観をどういう形で打ち立てていくのか、というふうにか考えた場合には、実は短期的な政治の社会では社会主義はだめだ、だから社会民主主義かリベラルか、あるいは京都の市長選挙ではどっこい共産主義も生きているという問題状況が生まれておりますが、どのような形で正常な人類の歩みをいま取り戻せるのかということが、私は高度経済成長を批判的にみる場合のひとつの視点になりうるのではないだろうかと思っております。

もうひとつ『戦後革新の半日陰』から私なりに学びとったのは、清水先生の思想形成なり、私なりに紹介しました歴史像の構成なりに大きな影響をもっていたのは、実は岡山六高、東京大学経済学部ということではないかと思えます。それも、どなたの講義を聞いたかということよりも、私なりに整理しますと、人的ネットワークであります。いろんなところで総評型労働運動の影で、清水先生の人脈が活躍していたというのが読みとれます。私が清水先生の書評を引き受けたのは、私が現在有沢広巳さんの研究をしている経緯からです。経済学者の有沢さんの研究ということではなく、一九二〇年代後半にワイマール共和国下のベルリンに留学した日本人たちが、一体何を受け止めたのかという観点からの有沢研究です。私は有沢さんのそういうスタイル

の原点が実は一九二〇年代、関東大震災のあと渡ったベルリンでの青春にあると思っております。その時代にかかわった人的ネットワークというものが戦後民主主義の制度的枠組み、つまり有沢さんの経済政策上のさまざまな実績等々に大きな影響を与えているということが、私なりに調べてわかってきました。清水さんのネットワークとの比較で言いますと、二〇年代の有沢さんの青春ネットワークの方が、私にはおもしろかった。そこには直接的な政治とか、直接的な労働運動とか、直接的な経済分析とかだけではない、文化や芸術やなかには講堂館の柔道教師もおりまして、スポーツ等々を含めた異業種、異世界の方々がはいっており、実はそれが戦後の有沢さんの歩みの中にもさまざまな形で、影に日向に半日陰と言ってもいいかもしれませんが、影響を与えていると思われまます。それに比べますと、清水先生の戦後の六高、東大経済ネットワークの方は、私にはややおもしろくなくて、と言うよりもこの本に書いていらっしゃるのはその部分だけなのかもしれませんが、ある意味では直接的に政治的な、あるいは直接的に経済的な世界が出てきます。実はそれが第三の史観をつくるさいの問題と云いますか、その新しい文明を構想する上でやや視覚が狭くなっているように私には思われま

す。
私が経済学者であった平田清明さんの本を読んでいておもしろかったのは、平田さんが

パリに行つて、哲学者の森有正さんとヘーゲルを読みながら社会主義の議論をしているわけです。その中で、平田さんが市民社会と社会主義という問題設定に対して、森有正さんは、「日本では共産主義とか社会主義とかを言う前に、まず社会をつくつたらどうなんだい」とおっしゃったそうです。この中でも社会主義か社会民主主義か共産主義かという問題設定がいっぱい出てきます。しかしそれは世界的なイクスツリーム（極端な）の時代の日本の特殊なイクスツリームの中で、いわばコップの中の嵐であつたのではないだろうかと思われような文明的な変化というものが、二一世紀を前にして起こつてきているように思われます。その意味では、清水先生は社会的左翼とおっしゃっているわけですが、私は「まず社会を」という視点を加味していかなければ、おそらく二一世紀に社会主義ということばにかつてこめられていたような意味が再生するというのは困難ではないだろうかと思ひます。ましてや、それを戦後革新の延長上で創造するというのは困難ではないだろうかと思ひます。

しかしたとえば、阪神大震災に二二〇万人の若者たちが出かけていってさまざまな活動に従事したという事実、あるいはいまテレビ等々で問題になっていきます、薬害エイズを追求してきた社会運動を構成している人々をみますと、私の知る限りでは、いままでの社会運動、あるいは清水さんの本の中であつかわ

れている階層とは違つた人々が、さまざまな社会的な活動に参加していると思われまふ。そういうものを考えますと、「日本型社会主義の創造をめざして」というこの副題を私なりに、「日本型社会の創造と二一世紀の民主主義の創造をめざして」というふうに読み変えて、あとの世代が引き受けていくということが必要なのだと考えていまして、そのために微力ながら努力していきたいと思つております。

労働者自主管理の可能性

平井陽一（法政大学）

私は清水先生が書かれた本を読んで問題提起をするというよりも、清水先生がかかわつてきた運動を、私がこれまで調べてきた中で受けた影響をふまえて、労働分野からの問題提起としたいと思ひます。労働者管理という視点から清水先生がかかわつてきた運動をふまえて、三つの点について私なりの考え方を述べます。

最初は三池の職場闘争についてです。私が大学院の学生のころに清水先生の紹介状をいただきまして、三池を訪ねました。一九六〇年のはるかに終わっていましたが、資料や聞き取りから知り得たことですが、三池の職場闘争は輪番制とか生産コントロールとかいったことばに代表されるような労働者的な



平井陽一氏

職場秩序が形成されていきました。これは組合の末端職場組織が職制の作業指示、権限をとつて、自分たちで作業の量とか作業の手順強度を決めて行つていきました。これがのちの三池大争議の争点になつたと、私は考えています。末端職制がいなくても作業は労働者だけでも行えるということをもつて示した事例であつたわけです。この本の中では、職場闘争そのものについてはふれておりませんが、技術革新と職場闘争というところで、清水先生が三池型の職場闘争は、技術革新が行われるようになってからやりやすくなつていっているということを述べておられます。それに対して熊沢先生が、アメリカやイギリスのベルトコンベアー職場では職場闘争が行われていたという疑問を提示し、清水先生は「自由時間、休憩時間とか、作業時間内での区分け活動が技術革新によってしにくくなつてきた。それで三池型の職場闘争がやりにくくなつてきた」と反論されて話は終わっています。私が

気になるのは、輪番制とか生産コントロールが行われていた三池の炭鉱の職場というのは、従来の熟練労働が解体された職場での実践だったわけです。たしかに技術革新は職場に影響を与えますが、この問題についてはこれからも検討していく必要があるのではないかと思っております。

二番目のテーマに移ります。この本ではふれておりませんが、私の問題関心から地域レベルでの労働者管理ということでは、全金南大阪の自主管理闘争があげられます。一九七〇年代の春闘が盛んなときに、賃金でいえば西高東低の労働運動が全金のレベルで南からおこりました。オイルショック後、運動が様変わりするわけですが、七〇年代後半に組合弾圧の嵐がふきあれます。組合をつぶすためならば企業もつぶしかまわないというメチャクチャなやり方で、それまで南大阪で七〇年代に春闘を盛んにして地域闘争をやったつくった組合がつぶされたわけです。その中でもいくつかの組合、たとえば全金の田中機械とか矢賀製作所などが自主生産を始めました。東京でもペトリとか浜田精機などが自主生産を行いました。どこでも同じような問題はあったと思いますが、自主生産をするときの問題はいくつかあります。一つには闘争か生産かという問題。あるいは生産にかぎっても、どこから原材料を仕入れて、完成品なり中間製品をどこに販売するのかという、経営者が逃げて組合だけで管理している自主生

産にどこの会社が信用を供与して買うのか、あるいは製品を売るのかという困難な中で動いていった事例です。たしかに自主生産というのは、多難な問題をふくんでいますけれども、企業が倒産したときに、もう一つの選択として重みをもった運動であったのではないかと思います。事実、田中と矢賀は闘争に勝ち、組合は解散せずにいまだに健在に活躍しております。

三番目の問題は、総評の長期政策委員会の「社会経済的プログラム」です。三池の職場闘争とか全金の運動とちがいで、実現しなかったプログラムです。ただし、一九六〇年の石炭から石油へという大きなエネルギー革命、産業構造を革新しようというときに、労働者の側からこういう対案もあるんだということを非常に短期間に勢力的に「総評の長期政策委員会」はプログラムにまとめたわけです。「石炭は非常に流通経路が複雑なのでこれを簡単にしろ」とか、「石炭を液化しよう」とか、発想がユニークでスケールが大きいのでびっくりしたんですが、「売ってもあまり金にならない低品位炭は産炭地で火力発電にして電力化し、九州の電力は大阪へ、北海道で発電した電力は東京へというふうに小発ケーブルで日本列島を縦断して送電する」という、読んでいて楽しくなるロマンが語られていました。これは事情があって、陽の目をみなかったということ清水先生からお聞きしました。先生は本の中で、「長期政策委

員会」自体はお蔵入りしていないんだと言われていますが、このプログラム自身が残念ながらお蔵入りしたということです。ここではもう一つの産業政策が語られていたと言えると思います。

いま三つのことを私はバラバラに申しあげました。実は最近、労働組合で人事権や経営権について、「労働組合も関与すべきだ」と言っています。たとえば、商業労連の会長代行が去年の七月上旬の「労働経済旬報」で次のようなことを言っています。「人事権や経



シンポジウム会場

営権への組合関与が必要で、それを保証するものは情報公開である。仕事そのもののあり方に労働組合が参加決定していくことが重要だ。これはまさに、労働者自主管理の流れをくむ発想であるわけですが、「組合が人事権や経営権に関与できるための情報公開は、経営側が公開しなくてもテレビ、新聞、雑誌で手に入れられるので、かたくなに経営側がオープンにしないでどうせわかるんだから、経営側はオープンにすべきです」という言い方をしています。しかし私はそんなに甘いものではないと思っています。労使関係に一定の緊張がないところでは、メディアがオープンしているからあなたもオープンにしなさいという形での情報公開、それを踏まえての人事権や経営権への参加というのは、おそらくありえないだろうと思います。そういう人事権や経営権への参加が保証されるならば、三池の職場闘争とか、南大阪の企業レベルでの自主管理も選択肢の一つだということを頭に入れた交渉、産業レベル、国レベルでの、それこそ総評の「長期政策委員会」がつくったプログラムでどういうことが問題になり、何が原因で実現しなかったのか、あるいは運動が失敗したのか成功したのかという過去の反省がなくては、いくら単産が人事権の介入と言っても、それは絵に書いた餅にしかならないと思います。ただし、組合が関与すべきだということはいくつかの組合、産別でも言っていることであります。産業政策を積極的に

提言しているところもあります。そのときにそれが果実をむすぶかどうかは、いま言ったような過去の経験から過去の実績を省みる必要があるのではないと思います。労働者管理の視点で述べましたが、労働者管理の地下水脈がまたあふれ出るか、こぼれ出るかわかりませんが、ふたたび出てくることを願っております。

地域社会の再構築

小畑精武（自治労本部）

この本では、地域のユニオンというのは何やってんだ、こんなのは労働組合かという議論もされています。司会者から「新しい社会運動の萌芽」という紹介でした。しかし私は、社会運動として始めたわけではなくて、大学の闘争のときにぶらぶらしていたときに、先輩が地区労のオルグをしていたことが縁で、一九六九年の一月から江戸川区労のオルグになりました。

江戸川は、東部労働運動、戦前でいえば南葛労働組合の運動がありますし、戦後も先輩たちの中小の労働運動があります。そういう上に私たちの地域の労働運動もあったわけです。ペトリの争議などは一人の首切りも許さないということや地域のモットーにしながら、あるいはパトカーよりも早くかけつけるという先輩たちの運動を引継ぎながらやってきま



小畑精武（おばた よしたけ）氏

した。当時は職場に労働組合を作るといのが私たちの一つの原則でした。その背景には、日本の終身雇用があり、年功序列賃金があり、企業内の本工組合がありました。できるだけ企業で長く働きつづける、あるいは企業の中で年とともに賃金もあがっていく、これが私たちはモデルとして考えてきたと思います。しかし一九八〇年にはいって、地域での労働相談活動などをやっていた中で、そういう層ではない労働者たちに会いました。パートタイマーであるとか、あるいは零細企業で働いている方とかです。そういう人々は終身雇用、年功序列賃金、あるいは本工などは関係ないわけです。江戸川という場に自分の職場がある、その中で組合作りをしようということでした。結果的に出てきたのが、「地域の労働組合をつくらうではないか」ということでした。伝統的な発想ですと、地域合同労組です。ただ、何となく地域合同労組はどうも根くらのイメージがあるので、パートの新しい

い人を入れて活動するのに合わないというところで、労働組合ならユニオンだ、江戸川の地域のユニオンにしようということでした。

ユニオンの運動は、最初は相談活動を重視しております。解雇の問題が現実には多いです。解雇というのは、時代の反映です。つまり、当時でいえば、パートの解雇が非常に多かった。最近でいえば、管理職の解雇も多い。つい最近まで多かったのは外国人労働者です。常に新しい労働問題といえますか、そこにアントナのように相談が飛び込んでくるという状況でした。それに対して、これまでの大きな組合は充分な対応ができなかったということです。隙間産業的に、ユニオンの価値があったのかなと思っています。

それから、今日の一つのテーマとして、さきほど加藤先生は「社会をつくる」ということを言われましたが、これは地域社会、コミュニティづくりの意味だと思います。コミュニティユニオンの場合には、二つの勝手な思い込みがあります。一つは労働者のコミュニティ。これは必ずしも地域にこだわらない。全国的なネットワーク、ユニオンの運動も毎年交流集会をしています。北から南へのネットワークを組んで、大きな組合でなくとも、問題があればその地域のユニオンに連絡すれば、ユニオンからその会社に抗議に行くというネットワークの活動、そういう意味でのコミュニティです。

それから地域の中のネットワークづくり

です。これはどこのユニオンも、組織は小さいけれどもネットワークは大きいということの特徴にできています。そうした地域社会の見直しがこれからの課題です。清水さんの本の中にも、高野実さんのいう地域ぐるみの闘争とか三池の地域の闘争がありますが、その時代は労働者階級が地域をひっぱっていくんだという考え方に基づいてたかかってきたわけです。いまでは労働者階級のヘゲモニーというにはおこがましいような時代ですので、社会の一員として地域社会の中で生きていくということ。労働者、障害者、高齢者たちを含んだ地域での地域づくりがこれからの社会づくりの中でキーポイントになるのではないかと思っています。

これから高齢化社会を迎えるなかで、地域をどのように再構築していくのか、地域をどのようにつくっていくのかを考えなければなりません。地域福祉がこれから問題になるでしょう。いまある地域社会そのものではなくて、むしろ一人一人がもう一度地域の市民としてどういう社会をつくっていくのかということ。市民というのは、三つの義務があると言った人がいました。働く義務、地域における義務、家庭における義務です。われわれは企業への義務だけで生きてきたのではないのでしょうか。少なくともそういう三つの義務に結びつくような活動をしていかなければと思っております。同時に企業の中で団結して賃金が決まってくるということだけではな

く、個人の労働条件などにたいして、どのような社会的なものさし、労働基準をもとめるかが問われてきていると思います。そういうところから新しい質の運動をつくっていきたいと思います。



シンポジウム会場

福祉経済社会の担い手を

五辻 活 (消費生活研究所)

清水先生の本に、高野実さんが亡くなられた間際に、私どもが除名された社青同反戦青年委員会に興味をしめされ、また心配もされていたということが出てきます。猪俣津南雄研究会にもひっぱりこんでいただいたり、われわれの未熟な青年運動をご指導いただいたわけです。猪俣研究会のイニシヤティブグループ、機能前衛、横断左翼ということが、私のいまの組織的なふるまい方をも決めてくれるように思いますが、「機能前衛横断左翼」ということは、いまでも必要なのではないかと思えます。労働組合左翼とか社会党の中の左翼とかだけではなく、いまの混沌の時代といえますか、自民党やさきがけ、新進党のなかにも、企業の経営者、中堅の管理者のなかにも、新しい組織改革、研究会ということで、毎月一〇〇名くらいが集まって、勤労社会の中から組織改革をしていこうという集団活動があります。私はその中で福祉の問題、超高齢化、消費者社会の到来を目の前にして、福祉の問題をどのように社会システムにして、なおかつ経済を生み出していくのかということを考えております。

さきほどのみなさんの問題提起にからめて言いますと、私も社会主義の再生ということ

は頭の中にありません。日本における自立した個人としての市民とその連帯、つまり社会連帯としての市民社会が形成されていないんです。これをどうつくっていくかということも、生活協同組合の活動をやりながらテーマとしています。

市民社会というものがなぜ日本で形成されてこなかったのか、自立した市民はなぜこんなに弱いのか、ということが日本社会の特質です。いままでは、あまりにも企業福祉社会に長く市民が依存しすぎたことが大きく、いわゆる鉄のトライアングル、政・官・財の癒着が、日本の社会の運命もあぶなくしていると思っております。ただし、私は期待と可能性もふくめて考えております。それは、地方分権推進委員会が地方分権についてどのような提言をだすかということ、去年出された社会保障審議会の勧告の二つです。それから、望ましい法律でないかぎり限界があるのですが、市民ボランティア活動支援法・市民活動支援法・情報公開法・公的介護保険に私は期待しています。これをよりどころにしなから、市民の福祉を事業にして、なおかつ福祉経済社会の新しい経済の担い手をつくっていく必要があります。福祉経済社会を市民がどう担っていくのかということは、女性たちが地域で福祉事業を起し、働き手になっていくということだと私は思っており、それを手がけていきたいと思っております。企業福祉社会に長くつかり過ぎ、日本の自立した市民社会が



五辻 活(いつつじ めぐみ)氏

阻害されてきましたが、その束縛に気がついて自立し始めたのは女性なのです。子供や育児や家事というものを女性たちはどんどん手抜きをして、合理化をして、いろんな形で自己実現と社会参加をし始めています。どのように経済の担い手として、日本の自立した市民社会の形成の一つの大きな力になるかということに私は期待を抱いています。

清水先生の本の中で言われていましたように、われわれは日本的社民の形成ということに失敗してきたわけですから、新しい社会システムをつくる必要があります。政・官・財の癒着、何百兆円という財政を市民が参加できないところで、また官僚自身もコントロールできないものが走りつづけています。それがいまの日本社会の危険な状態だと思います。日本は、国民から保険や税金を国家が中央集権的に集めて、このまわりにいるんな業界の利権がむらがっている社会ですが、厚生省のHIV訴訟の問題では、いまやっとなつきくす

しが始まったのではないかと思っています。政党が、たとえば社会党が新進党に行ったり、自社さ連合になったりするものは、中央集権がもっている利権にすがりついて存命しようとする

しているわけですから、市民がつかえる法律、自治制度をつかいこなしていく市民セクターを、私は日陰のところからがんばっていきたいと思っています。

日本型産業民主主義の形成

兵藤 鈞（埼玉大学）

対話者から 新しい社会運動の 担い手の形成

市民社会の自立

田口富久治

清水先生のこれまでの行動や、最近の思想についての私の考え方は、『戦後革新の半日陰』の第六回目の討論についての紙上参加（四〇九〜四一〇頁）で簡単に書いてあります。清水先生の社会的左翼という問題や「結語 私と社会主義」でお書きになっている「第三の道」「探究の軌跡」「再生への橋頭堡」という議論にはほとんど同感であります。ただ、一点だけ先生と力点の置き方がちがうかなと思うところは、先生の議論は、政治の問題として、平等や政治の参加を勝ち取ろうとする解放政治の問題に終始一貫力点が置かれています。それはそれとして、非常に正

当なのですが、高度近代の現在の状況においては、それだけが政治の課題なのではないのです。イギリスの社会学者のギデンズが、「ライフスタイルにかかわる政治、あるいは自分の生活、自分の生命を決定する、あるいは実現するというにかかわる政治」というものが、非常に重要な意味をもっている。これは先進社会だけではなくて、実は現在のグローバル化といわれる時代状況の中で、中心的な課題になっている」と言っています。日本の伝統的な革新は、政治のその側面については比較的無関心であったのではないかと思えます。さきほど何人かの方が、「市民社会における自立」等々についてふれられています。その場合中心になっている問題は、市民社会の構成員が自分の生き方をどのように決めるのかというのが中心になり、問題を全体として組み立てていくのが政治の課題に

なっているというのが私の見解です。この点清水先生と意見が非常に違っているとも思いませんが、申しあげておきたいと思えます。

私は総評の「組織綱領草案」について三回ほど文章を書いています。一回目は、労働運動研究者集団が活動を始めた最初のころ、『月刊労働問題』に書いた「春闘の思想と職場闘争論」という小さな文章で、二回目は清水先生の研究会に参加して書いた「職場の労使関係と労働組合」です。そして、「総評四〇年史」が編纂される際に、「組織綱領草案」という文を私が担当しました。一回から読み返してみると、そのたびに変節を重ねています。それはおそらく清水先生が抱かれた思いから、ある部分は遠ざかっているのではないかと思っています。そう思った中の一つは、七〇年代に書いたときは、「組織綱領草案」が出るプロセスの中でご存知のように逆コースという問題があり、日本の職制をどのようにとらえるかということが重要な論点になっていたと思います。日本の資本主義にある前近代的な要素にどういふふうに対決をするか、ということがひとつのモチーフであったのではないかと思えます。最初のころ私が清水先生に異をとなえたとすれば、「あれは



兵藤 釗(ひょうどう つとむ)氏

日本の高度成長期の始まりの時点にあって、戦前復帰というよりも、新しい日本の生産システムに向かっての一環ではないか」ということでした。われわれも時代の子ですから、ある種の自主管理型社会主義というものをどこかに思い描きながら、そういう方向での職場闘争がどうあるべきかというようなことを考えたいということから出発したと思います。しかし二度、三度書いた過程の中で、私がどういうことにこだわってきたかと考えると、日本の企業の中における職制はかなり日本的なものだということをもう少し定めてみる必要があるのではないかと思います。

たとえば、イギリスではフォアマンに選出されると、いままで組合員であったとしてもその組合からぬける。ところが、ドイツではフォアマンの募集の仕方は、イギリスと同じでもフォアマンの選任過程に「経営協議会」がかんでおり、フォアマンのメンバーになったからには、I・Gメタルメンバーからぬけ

ない。アメリカはイギリスに近いと思いますが、日本はかなり違う。日本の企業社会のあり方の中で、どういうことが問題かと考えなければならぬのではないかと気が持ちは強くなってきました。

また、「組織綱領草案」について、藤田若雄先生の考え方と清水先生の考え方がどこが似ていて、どこが違っていているかということを考えてみる必要があるかと思ったことがあります。藤田先生は、三池の争議が敗北する直前から直後にかけて二、三の文章を書かれています。その中で、藤田先生が書かれていますことは、「あっち向け闘争をどう考えるか」です。そしてまた、いわゆるXYZ論について、「Zを大事にする運動が必要ではないか。企業側でもない、組合側でもない、いわば中間である普通の人々を大事にした運動論、組織論が重要ではないか」ということです。清水先生もZ論に関しては同じ考えだと言われています。職制をどう考えていくかという問題の中に、ある分岐点があるのかもしれないと思います。そこに日本的と言われている意味とは何かを考えてみる必要があるかと思っています。

私はゴルバチョフが登場してきたときには、「なお可能性をさぐる道もあるかもしれない」と思いましたが、ソ連解体がおこってきたことで、システムとしての社会主義はむづかしいと思います。そういう中でわれわれに課されていることは、商品経済とか資本を廃

絶してしまうことは不可能なことで、資本の活動に対して、どういう枠をつくっていくかということですが、もう一つは、おそらく参加型の産業民主主義をどういうふうな充実していくかが問われているのではないかと思います。社会民主主義は、ある種の階級型社会の伝統のある所において、初めて成立しうるのではないか。日本は違った中身のものが問われているのではないかと考えております。

西欧的労働組合への 脱皮の芽

熊沢 誠(甲南大学)

私は、清水先生とは距離的にも違うし、個人的な面識はなかったんですが、対話者の中では立場が一番近いのではないかと印象を持っております。我田引水ですが、三点くらいは共通の認識になっていると思います。この本の話題の半分は労働組合運動です。現在の労働組合運動の評価はいろいろあると思いますが、六〇年代から七〇年代にかけての技術革新とか労働者の変化とか、あるいは労務管理の変化などに非常に深くかかわっております。これまでの労働運動を支えてきたソサイアティが、職場の変化で難しくなってきたということ、何を議論するにも考えておかななくてはいけないということです。

もう一つは、戦後革新の衰退というものです。日本の伝統の価値、生活上とか平和と



熊沢 誠氏

か民主主義とかというものを、六〇年代から七〇年代にかけて非常にグローバルな新しい社会運動が展開したときに、平井さんのことばでいえば、ワーカースコントロール的な労働運動であるとか、社会主義の中で管理の強化に対する反乱だとか、あるいはウーマンリブとか、環境保全の市民運動とか、そういうグローバルな運動が展開したときに、戦後革新の伝統的な価値の見直し、グローバルな空気を吸収して変えなければならなかったということだと思います。そこが社会党も共産党も鈍感であった。平和なり民主主義なり、生活上なりということと主張することにおける革新の側のアイデンティティを七〇年代後半から急速に失わせたのです。

三つ目は、これは住沢先生の問題提起にもかかわることなんですが、政権交代の受け皿をつくるということをどれほど重視するかということではないかと思っております。社

会左翼というか、社会のネットワーク、対抗文化をもつようなサイアティというものを構築することが大事だという点です。これを先生は社会的左翼の形成と考えられたのです。具体的にはコミュニティユニオンとか、いろんなネットワークを考えておられるわけで、私もコミュニティユニオン応援団です。

その上で、さらに二点だけ申します。一つはそういう社会的左翼のネットワークを抱え込むことができる経済体制があるということだと思います。社会民主主義の時代ではないとか、日本では別の命名でもないではないかという言い方がありますが、やはり社会民主主義だということを出しておきたいと思っております。私はふりかえるほどの個人史も持っているわけではありませんが、戦後民主主義の素朴な信奉者から始まり、構造改革派にいたり、それから長らくサンジカリストになり、いまでも政治などどうでもいいではないかと言いたい気持ちがあります。それから自主管理社会主義になり、そして次善の体制としては社民しかしかたがないかなというふうに移ってきた者であります。やはりいままでも形成されてきたものとしては、社会民主主義かなという感じがします。住沢先生は社会民主主義を誰が担うかに最後まで執着せよと言われます。このところは痛いところだと思います。私に、いかに日本の労働者は欧米的な強力な労働組合運動とか、あるいは社会民主主義の担い手として負の遺産を背負っていることはよくわかっているつ

もりなんです。しかし、新自由主義でもない社会主義でもないと考えたら、一番人間的な体制は社会民主主義かと思えます。そこで、現在の労働組合運動の大きな流れは、いままでここにきてようやく西欧的な意味での労働組合運動を構築しなければならぬ時点で迫られてきていることを指摘していく必要があると思います。それは、ご存じのように能力的な選別が一つの極にまでまいりまして、現在の労働組合を支えている終身雇用支持の人たちが少数派になっています。いままでは企業の中の正社員にとどまる人、企業の能力的な選別に勝ちのこった人、その人が同時に組合員で、なんだかんだと言っても、その人は支配的な労働管理の中心的内容の能力主義に肯定的になるんです。そして、能力的競争に敏ならざる人は、非組合員として発言権をうしなってきたということだと思います。それが、労働組合運動が社会的にならなかつた理由です。しかしそこはいま変わってきているのではないかと。変わらざるを得ないのではないかと。経営は、専門職ならびに一般職は正社員でなくていいと言っているわけです。彼らは横断的労働市場を考えているわけです。日本にクラフトユニオンなり、一般組合なり、横断組合がないから言っていてすむんです。しかし労働者の方はすまないと考えるべきであって、そうすると、これからは企業別組合とコミュニティユニオンとか、あるいは単座機能だとかの連合や協力が必要になってくる

わけです。私は一方では社会民主主義を固執していかねばと考へ、一番考へておきたいのは、労働組合運動の強化であり、社会的な存在意義の確認ということ。コミュニ

会場から 質問と意見交流

寛容と厳密性

猪瀬直樹（作家） 清水先生が労働運動から遠のいておられたときに信州大学に赴任されました。私は第一期のゼミの生徒です。そのころ全共闘運動が始まりました。その中で清水先生と対話をしています、非常に寛容であるということと同時に非常に厳密さを感じました。寛容であるということは社民につながってくるんです。寛容と厳密ということ



猪瀬直樹氏

ティユニオンの応援団ではありませんけれども、そこにしか望みがないとは考えたくないと思っております。

は非常に大事なことで、その反対は頑固と情性ということになるのでしょうか。

いままでのみなさんのご発言は、ちょっとずつ違うことをおっしゃっていますが、清水先生は昔から「ちょっと違う」ということをおっしゃっていました。ソ連型社会主義が崩壊して、みなさんがちょっとずつ違うことを言うのが当たり前になりましたので非常にいいことだと思います。清水先生の本の中に「日本の社民は何だったのか」とおっしゃっているところがあります（二九六頁）。日本の社民を欧米的な意味で受け取られようとした、実際はそうあるべきだったと思うんですが、そのときにロシア革命が成功して、ロシア主義的な革命的な共産党的なものが主流になっていき、社民の立脚基盤というものが、ソ連型社会主義ができたころの日本で偏見・変質を余儀なくされてきたわけです。このあたりで、清水さんが「ちょっとちがう」と言いたかったことではないかと思えます。日本

の運動がどこかちがうということの一番の重要なところだったと思えます。

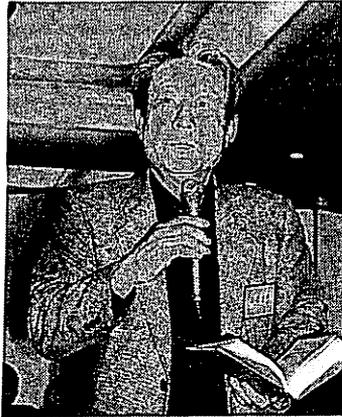
労働運動の人は終身雇用が大事だと言うけれども、終身雇用で代表されるものは非常に閉鎖的なもので、情報を外に出さないスタイルです。いま、エイズのHIV訴訟の問題で、なかったと言われている資料が突然に出てきたり、住専問題で農水省の経済局長と大蔵省の銀行局長の覚え書きが突然出てきたりとか、そういうふうには何か隠してしまふ構造を日本の官僚機構が一番持っていると思います。日本の官僚機構は開発独裁型のポリシエビキだと思えます。それが日本をここまでつくりあげてきて、閉鎖的な終身雇用型の企業にその写し絵としてくらわれてきた。そういう中で、清水先生は社民という形で、横のひろがりや何か可能性としてもたせることができないかということをずっと模索されてきた。それは非常にあたっていたと思うし、清水先生は長生きされてよかったと思うんです。ソ連型の社会主義が崩壊するところを見届けていただいて。

これからのあり方として、たとえば情報公開の重視です。官僚のネットワークは情報を外から取られることが彼らのレーゾンテールをおびやかすことになるわけです。民事訴訟法の改正が七〇年ぶりに行われますが、日本の官僚は、さまざまな例外規定を作ることによって、なお延命しようとしているのが現在の状況だと思えます。ある凝り固まった日本

官僚と日本共産党的な考え方ではない、広がりのある寛容さと、一つ一つに対して厳密な根拠を求めていくような緻密な展開をしなれば、日本のもっている官僚党に対抗できないと思います。そしてちょっと違うことを清水さんは言い続けてきたし、みなさんが少しずつ違うことを言い始めた、そのへんが清水先生の業績ではないと思います。

社会派官僚の評価

高橋彦博（法政大学） 官僚制論について質問したい。この本の中で「時間が充分あれば戦時中の革新官僚論をやりたい」（六六、六七頁）と清水先生はおっしゃっています。高木さんは、「内務省の一部の官僚の動向もふくめてとらえていいのではないか」と言われています。率直に言いまして、和田博雄、稲葉修三、勝間田清一、大来佐武郎が戦前の協調会とか企画院などから流れて、戦後の経済安定本部に集中しているのです。この人た



高橋彦博氏

ちは新官僚とか革新官僚というふうにとらえきれないところがありまして、ある意味では社会派官僚ではないかと思えます。社会派官僚の中に清水先生自身も与っておられたという経過が、この本で明らかになったわけです。国家機構を社会化していく、さきほどの議論で言うならば、ソーシャリズムとしての社会主義ではないんです。ソサイアティズムとしての社会主義を追求する可能性が、社会派官僚によって担われていたにもかかわらず、社会派官僚たちはその点を充分に自覚しなかったという点があると思えます。清水先生自身は、むしろそのこと訣別した形で戦後の総評的運動を展開してこられたのではないかと思っております、その点を指摘いただきたいと思います。

日本の特殊性とは

三宅明正（千葉大学） 今日の発言のなかにも、五〇年代、六〇年代の総評運動、あるいは戦後革新の担い手ですとか、あるいは組織・運動のあり方について、日本の特殊性というニュアンスがあったと思うんですが、日本的とか、日本に特殊なあり方というものをどういうふうにお考えかという点を、清水先生に伺いたいと思います。

日本の特殊性という場合の比較の軸はつねに西欧です。労働組合が抵抗し、対案を出し、産業化の中で社会運動が激しくなる中で、ある程度孤立化していくという軌跡があったと



三宅明正氏

思うのです。東アジアについてはずいぶん異なることが言われていますが、この本に出てくるインドやエジプトの状況を見て思うのは、日本の戦前と高度成長期が一緒になって横倒しになって進んでいるかのようで、そこにおける左翼的な勢力は、総評あるいは総評左派と似たように行動して影響力を広めているのですが、必ずしもうまくいかないという印象を持っています。五〇年代、六〇年代の状況というものをどの程度日本に特有のものと考えるか、ご意見いただければたいへんありがたいと思います。

いかにして産業型民主主義を形成するか

驚尾悦也（連合事務局長） 私は、労働者としての市民というか、市民としての労働者というものが、どのように社会のメカニズムに参加しているかということが重要だと思えます。いわば市民社会を形成してそのグルー



鷺尾悦也氏

プが、兵藤先生流に言くと、「資本の活動へ
枠をはめる」ことが重要だということ。兵藤先生はシステムとしての社会主義はむっ
かしいとおっしゃるんですが、ではどのような
な枠組みで参加型産業民主主義をつくるか
ということ自体は、いまでも変わらなく、私
どもも形成されなくて困っています。コミュニ
ティユニオンの問題だとか、ゼネラルユニ
オンをどう形成するかとか、あるいは総評的
な言葉ではありませんが、地域の労働運動を
どのように形成するかということに腐心して
るわけです。

問題は、熊沢先生がたいへん適切に分析を
されましたが、終身雇用型の労働者が少数派
になって、横断的な労働市場がつかられ、し
かし日本においては、横断的な労働市場にお
ける労働者側の担い手が形成されないとい
うのが痛いほどよくわかるわけです。既存のメ
カニズムで動いている労働者と社会的・横断
的な労働市場をどのように噛み合わせていく

かということについては、すべてが学問的に
割り切れるような社会が形成されればいいの
ですが、いわばミックスされている中で、ど
ういうふうに関連感をつくりながら、担い手
を形成していくかという問題なんです。ここ
が非常にむづかしいところです。現場の地域
の労働運動やあるいは地方連合会と議論をい
たしますと、縦軸、横軸論が出るわけです。

地域労働運動の中で主要産別である縦軸が制
約する、そして地域労働運動の側からの提言
が、縦軸の産業別単位の職場の労働運動と違
和感があるんです。これをどう調和してい
かということがむづかしい問題になっている
と思うんです。私の回答としては、参加型産
業民主主義を形成し、市民社会を形成するた
めの条件づくり、さまざまな環境条件の整備
が私の仕事だと思っっているんですが、環境整
備をしただけでは主体的なリーダーシップを
発揮して市民社会をつくることにはならない
というところに私自身も悩みをもっているわけ
です。その点、先生が分析されました過去の総
評労働運動から連合にいたる章をいちばん最
初に読ませていただきました。いま三人の先
生方がご提起をされた共通した部分について
ぜひ先生の意見をうけたまわれれば幸いです。

日本国家形成の特殊性と現代

三階泰子(元鉄鋼労連書記) いまご発言
されていますが、鷺尾事務局長の末端の弟子と
いいますか、職場でいろいろと教えていた



三階泰子(さんがい やすこ)氏

いた者です。鉄鋼労連初代書記長清水慎三先
生にお目にかかることを楽しみにしてまいり
ました。私自身は鉄鋼労連の事務局の中で、
斜向かいに労働運動の移りゆくさまを見させ
ていただいたという一傍観者にすぎないん
ですが、鉄鋼労働者の生活の苦しさといま
すが、非常に華やかに労働運動の場でたか
ついているにもかかわらず、新日鉄とか住友、川
鉄といったそうそうたる大企業の生活がい
かにたいへんなものかを家計調査というさ
かな調査を通じて勉強させていただきました。
今回、先生の本を読ませていただいて、先生
のお兄さんが考古学者になられる方だった
ということ、私は非常に共感を覚えました。
先生がこの本の最後の方で、これまでいろ
んなものが実践され、研究されてきて、日本
の特殊性、日本の国家なり、社会組織なり、ま
た階級なりを見てこられて、それは最近のも
のではなく、古代のあたりから問題がある
のではないかとまとめられたような気がするわ

けです。私も日本国家の形成ということに非常に興味を持っておりまして、そういう古いところから始めて、日本の国家なり組織なり

総括コメント

清水慎三

階級なりをどのように見てこられたか。古代と現代をつなげた清水先生のご見解をうかがいたいと思っています。

総括コメントと言われましても、これは正直に言ってみたくしいです。私の本を叩き台になさったのですが、論点が多岐にわたっています。だいたい加藤さんが言われた自立型市民が核になって、どう社会形成をしていくかということが、最後まで問題点になっていくのではないかと思いますが、全体をそこに収斂するというわけにもいかないし、何をお話ししているか思案にくれているのが正直なところでは

三つのテーマを出してみたのですが、今日のみなさんのご発言をずっと通してみますと、必ずしもこの三つにはマッチしていないのではないかと思います。

実は今日の会合についてですが、ミニシンポジウムを開きたいと、高木さんと龍井さんが来られました。正月の五日の村山内閣が倒れた日でした。私は出版記念会的なものであれば、半日陰をみずから自認する男としては辞退する他はないと思っていたんですが、のっけからシンポジウムを持ちかけられました。私の癖を始めからみずかして持ってこられ、まんまとそれに乗ったわけです。そのときに、シンポジウムをやるのならテーマとしてこんなことが考えられないかということでは

まず自立型市民の形成という点です。日本社会を見ていると、だんだんそういう方も出てこられました。それにしても自立型市民の層が薄い。それを多くつくり出すことをめざしながらの社会形成をそれぞれの社会、社会層でやっていくということしか、具体的なアプローチとしてはないのではないかと思えます。だから初めから自立型市民がそこにいるという角度で問題を立てると、現実との落差が大きすぎて、そこまでいかないと挫折することになるのではないかと思えます。

各分野での自立型市民を核として、いろいろな実践を試行錯誤しながら積み重ねていくことを、かなり時間をかけて、じっくりと取り組むことを考えなければならぬのです。だから加藤さんの言われる社会主義だの何だの言う前に、社会形成をしていくことが先決

ではないかと言われるのは同感です。七〇年代から私も對抗社会・對抗文化の形成と、いろいろなものに書いてきました。それは、六〇年代の末期の諸情勢をみて、結局それまでの日本の体制に対するアンチテーゼを出すという意味で考えたのですが、結局物事の思考を文歴史的なところで考えるということ。だから社会主義も文歴史的転換の先駆として機能するような方向に行くべきではないかという考え方を七〇年代の初めころから持つようになりました。

そう思った動機は説明すると長くなりますが、たとえば公害問題が起こるとか、公害問題をテクノロジから起きた弊害をテクノロジでもって自制するというやり方がまずは取られるが、しかしそれで解決できるものではないことが、いくつかの例を積み上げていくことで明らかになった。要するに核兵器の問題にしても、基本的な現代の課題はやはり今の文明体系の中の改良では結局片づかないのだろう、人の生き方、労働の仕方というところまで突っ込んだ考え方で、そのおまかな意味で同質の価値観を持った人々たちによる社会集団を形成するところから始め、目標は大きく、人類の文歴史的転換ということ、具体的に言えば、ルネッサンス、宗教改革、大航海というものから開けてきた近現代文明の総体に対して、これに対抗する価値観を対置するということにしか結局社会主義をふく



総括コメントをする清水慎三氏

めて革新の行く終着駅はみつからないのだからと、私は考えてまいりました。

そういうものを担っていく担い手、そのネットワーク、これはリーダーとその核のネットワークは作れると思うんです。しかしそれらの人が社会全体の多数を占める、主流を形成する、日本社会の性格そのものが変わってくる、ということは私は容易でないと思います。ここところがヨーロッパ社会と日本社会を対比してみても、各々の点を直せば自立型人間がその重要部署に配置されれば、ヨーロッパ型社会でやれることは日本でもそのままやれるだろうというふうには、私は考

えないんです。それにはたいへんな努力が必要だと思っています。

最後の質問とも関連してくるわけですが、日本人社会をどうとらえるかということを考えはじめたのは、日本の企業社会の奥行きを深さを感じとったからであります。通常言われるタテ集団、横並びという問題、日本人社会の特性と言われるものをつくりあげてきたそのルーツは、日本人社会の形成と日本民族の形成にあり、それは水田稲作という生産体系とそれから種族混交が一〇〇年にわたって行われたことにあると思います。水田稲作が当時の技術水準に規定されて、中小河川湖沼を中心に開いていったこと、そして農機具は鉄製に変わってくる。それは相当長期にわたって朝鮮からしか得られなかったのです。こういうことを考えてみますと、タテ集団、横並びは、日本の民族形成のあり方と合致するし、それが一〇〇年の年月をかけてできたのがあった。それが今日の企業社会に及んでいるのです。

そここのところをときほぐす諸活動、特に担い手の養成、配置、こういうことを考えることが結局は、社会主義の再生にもつながると考えておるわけでありまして。だから、それがすぐにでもできるとは思っていない、その観点から、さしあたっては日本のリベラルをどう構築していくのかということを経由していかなくてはならないと思って、この問題提起の最後の項目に出したわけです。リベラル



パーティー会場



清水御夫妻と中島正道・高木郁朗氏

ということが永田町の論理、議員さんの生き残りという次元で扱われることはなはだ困ると思います。日本のリベラル市民層の役割はもっとたいせつなものではないかという問題を誰かしゃべらないかなと思って、まず冒頭にかかげたのですが、どうも討論がすれちがいになります、私自身まったく困り果ててこの座に座っていることをお察しいただきまして、一応のお役目に変えさせていただきますと思います。

シンポジウムの終了後、高木郁朗氏の司会で懇親会が開かれ、参加者のスピーチをはさみながら、和やかに歓談。田中幸男氏（元鉄鋼労連）の乾杯の音頭に続いて、高梨昌（日本労働研究機構）、高野孟（インサイダー編集長）、仲井富（公害問題研究会）、中野一郎（埼玉大学）、船井若夫（元国労）、大島藤太郎（元中央大学）、山部芳秀（元国民文化会議）、川上忠雄（法政大学）、五十嵐仁（同）、中沢孝夫（評論家）の各氏がスピーチを行った。

『戦後革新の半日陰』

日本型社会民主主義の創造をめざして

【主な内容】

半日陰の男がなぜライフヒストリーを

—— まえがきとして ——

第1部 戦前・戦時の知識社会のはざま

（一九四五年）

第2部 敗戦・占領下の激動期に直面して

（一九四五～五二年）

第3部 鉄鋼労連結成前後（一九五〇～五三年）

第4部 清水私案前後（一九五三～五五年）

—— 社会主義路線の探究 ——

第5部 総評組織綱領草案（一九五六～五八年）

第6部 安保と三池（一九五九～六〇年）

—— 修羅場のなかで ——

第7部 構造改革論争（一九六一～六三年）

—— 渦中の一人として ——

第8部 経済成長と体制支配の確立（一九六五～

八〇年）—— 運動現場の周辺から ——

第9部 多元化社会における革新勢力（一九八〇

年）

補遺 —— 言い残したこと ——

結語 私と社会主義 —— 第三の道を求めたロマ

ンの旅路 ——

清水慎三の理論と業績

私案、思考の軌跡 —— 著者、論文のなかから ——

【対話者】

田口富久治（たぐち・ふくじ）

立命館大学政策科学部教授・名古屋大学名誉教

授

兵藤 釧（ひょうどう・つとむ）

埼玉大学経済学部教授・東京大学名誉教授。

熊沢 誠（くまざわ・まこと）

甲南大学経済学部教授

高木郁朗（たかぎ・いくろう）

日本女子大学家政学部家政経済学科教授。

中島正道（なかじま・まさみち）

茨城大学農学部助教授。

清水慎三（しみず・しんぞう） 略歴

一九三二年一月一日 岡山県に生まれる。

一九三六年 東京帝国大学経済学部卒業、日本製

鉄株式会社入社

戦後革新の半日陰

【回顧と対話】

清水慎三 戦後鉄鋼労連初代書記長、総評の政策ブレーンなど労働運動の中核にありながら表舞台に立たなかった清水、三池争議の秘話も交えて語る革新運動と自らへの鎮魂歌。定価3296円

続・事故の鉄道史

佐々木富泰・網谷りょういち 好評4刷の「事故の鉄道史」の続編。通説となった鉄道事故原因を改めて検証し真の原因に迫る。餘部橋梁の列車転落など戦後の事故も収録。定価2884円

戦後日本の形成と発展

占領と改革の比較研究

皆村武一 近年公開の新資料を駆使して占領政策が日本経済に及ぼした影響、軍政下の琉球政策を分析、また独伊における占領政策を比較検討し、戦後日本の形成と発展を考察。定価7416円

人間の経済とは何か

経済学の革命

並木信義 過度円高、財政金融政策の失敗、空洞化の進展等はすべて人間知性の欠けた経済理論、思想によるとし、人間性、社会、経済そして研究方法の根本的見直しを主張する。定価1854円

戦場の記憶

富山一郎 日常と戦場は断絶していない。日常の中に戦場を引き出すことが日常を再認識することにつながる。沖縄と南洋諸島で何が行われたか、戦場と戦後のいまを問い直す。定価1854円

アメリカのフードシステム

食品産業・農業の静かな革命

シェルツ/ダフト編 小西孝康・中嶋康博監訳 われわれが消費している実に豊富で多様な食品を可能にしたのは農業・食品産業の革命的な変化である。アメリカを舞台にその背景と影響を様々な角度から検討する。定価3399円

開放中国のクルマたち

その技術と技術体制

山岡茂樹 開放中国におけるモノ作りの営み。それを織りなす思想と行動。本書は自動車技術を素材にその進化の来し方と行く末を論ずる。わが国技術界は中国から何を学ぶか。定価3708円

地域における戦時と戦後

庄内地方の農村・都市・社会運動 森武庵・大門正克編 太平洋戦争前後から戦後にかけて日本社会はどのように変貌したか。生産と生活に密接にかかわる地域社会をとりあげ、その変貌の総体的把握をめざす。定価5253円

日本経済評論社

東京都千代田区神田神保町3-2 ☎3230-1661

- 一九四一年 内閣企画院嘱託(物資動員計画班)
- 一九四二年 日本製鉄株式会社復職、同社八幡製鉄所勤務
- 一九四六年 日本製鉄株式会社退社
- 一九四六年 国民経済研究協会研究員
- 一九四七年 経済安定本部事務官(大臣官房賃動務)
- 一九四八年 総同盟調査部長
- 一九五一年 鉄鋼労連を結成、書記長、副委員長を歴任
- 日本社会党中央執行委員、同党政策審議会常任参与等、兼任(一九五六年まで)
- 総評長期政策委員会事務局長(一九六二年まで)
- 一九七〇年 信州大学人文学部教授(一九七九年まで)
- 一九七〇〜七三年 東京大学大学院講師(併任)
- 一九七九年 日本福祉大学経済学部教授(一九八

四年まで)

主な業績 『日本の社会民主主義』岩波書店、一九

六一年

『日本社会党史』(共著)芳賀書店、一

九六五年

『戦後革新勢力』青木書店、一九六六年
 『統一戦線論』青木書店、一九六八年
 『社会的左翼の可能性』(共著)新地平社、一九八四年

